

# メタ言語意識が言語運用力に及ぼす影響

— 統語的直観に関わる予備調査 —

赤松 猛 ・ 鈴木 悦子 ・ 小野 章\*

**要約**：外国語の学習においてメタ言語意識を活性化させることは重要だと考えられている。特に、日本のように限られた量のインプットしか与えられない環境においてはなおさらである。メタ言語意識は音韻的な側面、語彙的な側面、文構造や統語的な側面、語用論的な側面など多岐にわたるが、本稿では日本人中学生の統語的直観と品詞識別に関わる予備調査を行い、彼らの文法知識の一端を報告した。中学生にとっては難易度の高い英文中で、動詞を選ぶ課題と語の品詞を答えさせる課題を行い、その認識過程を言語化させた。その結果、統語的なメタ言語意識をもちつつある生徒はいるものの、多くの学習者は英文を読む際に語彙の意味に大きく依存する傾向があり、語彙に含まれる統語的な情報や知っている語や前後関係から文の構造を推測することが苦手であることがわかった。

**キーワード**：メタ言語意識、統語的直観、品詞識別

## I. はじめに

平成 20 年 3 月に公示された学習指導要領のキーワードのひとつに「言語活動の充実」が挙げられ、次期学習指導要領へ向けた検討においても、その考え方は踏襲されていると思われる。英語科においても、英語を活用して何ができるかを追求しなければならない一方で、英語科や国語科は言語そのものを扱う教科であり、いかにして言語に関わる基礎的な知識を身に付けさせるのかを考えていくことも同様に重要である。言語知識の習得（特に外国語習得）には言語について知る能力が必要とされ、その能力はメタ言語意識（メタ言語能力）<sup>1</sup>と呼ばれている。メタ言語意識については、さまざまところでその重要性が指摘されている。

第 8 期中央教育審議会初等中等分科会教育課程部会の言語能力の向上に関する特別チーム（2015）においては、国語科と外国語科の相互連携を視野に入れて、「課題や問題を追究していくプロセスの中で、コミュニケーション能力や言語要素的な知識を身に付けていく学習を、国語科・外国語科の両方でできると、言語は違っても問題を追究するプロセスというのは同じだということが分かったり（後略）」という意見が述べられていたり、「（前略）小学校の国語教育の中で、節・文・段落がどのように成り立っているかという足場を意識させるなどメタ言語的な感覚や気付きを促したり教えたりすることは、外国語を学ぶときにそのまま活

用できる非常に重要なスキル、感覚になる」とされている。

また、同教育課程部会外国語ワーキンググループ（2015）においても、「（前略）国語や外国語を使って理解したり表現したりするための言語に関する能力を高めていくためには、国語教育と外国語教育のそれぞれを充実させつつ、国語と外国語の音声・文字・語句や単語・文構造・表記の仕方等の特徴や違いに気付き、言語の仕組みを理解できるよう、国語教育と外国語教育を効果的に連携させていく必要がある」と述べられており、「国語教育や外国語教育においては、言葉の特徴やきまりに関し、音声（音韻を含む）やメタ言語の意識等を踏まえた指導が重要と指摘されており、引き続き、専門的な見地から検討を行う必要がある」と言及されている。

現行の学習指導要領においても、日本語と英語の相違に気付くという視点でメタ言語意識が取り上げられている。小学校外国語活動では内容に関して、「外国語の音声やリズムに慣れ親しむとともに、日本語との違いを知り、言葉の面白さや豊かさに気付くこと」が取り上げられ、中学校外国語科においては、言語材料の取扱いとして、「（前略）語順や修飾関係などにおける日本語との違いに留意して指導すること」が明記されている。

縄田（2015）では、国立大学教育学部において、国

\*広島大学大学院教育学研究科

語教育専攻の学生と英語教育専攻の学生が共通に履修する必修科目「日英対照言語学」の概要が紹介されている。これは将来の国語科教員と英語科教員に対して、言語学の基礎知識の習得・メタ言語意識の活性化・文法に対する否定的印象の払拭を目標として行われる授業であり、特に、メタ言語意識に関して、国語・英語という個別言語から脱却し、言語共通の規則性などに気付かせることにより、言語観の変容を促すことをねらっている。

末岡(2009)は言語教育の指導内容として、言語運用・言語知識・言語分析の3要素を挙げている。なかでも、言語分析に関しては、「その存在があまり意識されず、したがってあまり議論の対象になっていない」にもかかわらず、言語教育をより良いものにするための有効な手段として取り上げられている。言語分析とは言語を観察し分析する行為のことを指すとされ、「メタ言語能力を使う活動そのものである」と述べられている。

村岡(2012)は狭義の言語意識(Language Awareness)を「言語機能や形式に積極的な意識を向けることで育つ言語に対する感性または意識的な知識、言語に存在するパターンを知覚し、他の言語と比較する能力、メタ言語を操る能力、言語使用についてもっている直感や見識をメタ認知に変換する能力」と定義して、第二言語習得における「気づき(noticing)」の重要性を指摘している。「気づき」を通して、言語使用に対する意識が高まり、パターン化・比較・カテゴリー化・ルール化などの認知能力を向上させることができるとしている。

山岡(2013)は国語科教育と比較しながら、「メタ言語の力を身につけることは、英語科においては、指導過程としては想定されているにしても、目標とはみなされていない。しかし、言語の教育において育てるべき力が何であるかについての国語科の自己規定は、英語科にも妥当するものと考えられる。なぜならば、第1言語に比べ不如意な期間が長く続く外国語を、実際の場面で機能的に使用し、また自律的に学習を継続して力を高めていくためには、自らの言語使用を客体化して捉える力が必要だからである」と述べ、「問題解決力の向上という今日的課題に照らせば、生徒が自分の運用すべき知識・技能を明示的に意識することは重要な指導内容である」と述べている。

大津(2009)は母語教育と外国語教育を一体化した「言語教育」を提唱して、メタ言語意識の重要性を主張している。メタ言語意識とは「言語(知識)を意識化(客体化)し、ことばのおもしろさ、豊かさ、怖さを学習者に気づかせる」もので、メタ言語意識活性化のきっかけとなるものが「ことばへの気づき」であり、小学校段階において、母語を対象としてこの気づきを促すことが重要であるとしている。また、気づきの対象として、(1)ことばの仕組み(構造)、(2)ことばの機能(働き)、(3)ことばの普遍性と多様性が挙げられている。(1)の構造については、音韻・形態・統語・意味などの言語学的な諸側面が含まれるだけでなく、文を超えた文章などもその対象としている。

生越(2007)はメタ言語意識を「言語を客体として意識・観察・運用する力」と定義し、音韻への気づき、単語への気づき、言語形式・文法への気づき、運用上の気づきというように言語の4領域への「気づき」に分類している。なかでも、言語形式への気づきに関しては、非文や文法構造の認識力を取り上げ、文法構造については、主語・述語を認識する力、文を品詞に分けて構造的に認識する力が含まれるとしている。

## II. 研究の概要

### 1 目的

本研究の目的は、日本人英語学習者のメタ言語意識がどのように発達して、それが彼らの英語運用能力に影響を及ぼすのかを探ることである。ただし、上述のように、メタ言語意識にはさまざまな側面があり、その全体像を明らかにすることは容易ではない。本稿では、中学3年生を対象として実施した統語的直観に関する2つの予備調査の結果を報告し、英語の授業づくりや今後の研究への示唆を得ることを目的とする。

### 2 調査方法

#### (1) 対象

広島大学附属東雲中学校 第3学年 75名

#### (2) 実施時期

2015年12月上旬

#### (3) 調査内容

##### ①調査1

まとまった内容の英文を読みながら、文中の動詞または助動詞を□で囲む課題を与えた。英文を読む際に、主部や述部を無意識のうちにどれだけ認識してい

るのかを調査した。調査に使用した英文は私立大学の入試問題で出題された地球温暖化について書かれた英文の第1パラグラフである。総語数は137語、文の数は5文、動詞は11個含まれている。総語数137語のうち、本校で使用している検定教科書に掲載されていない語は40語(29.2%)に上る。英文の構造としては、いわゆる「同格のthat」(...the theory that ...)とセミコロンの使用(... is getting warmer: satellite measurements ...)が未習である。ただし、文構造は語彙に含まれる統語情報と切り離すことはできないので、語彙を知らない場合は文構造も未知のものとして認識される(例えばsuggestの後にthat節が続く)。中学生にとって約1/3が未知語である難解な英文を読ませることは内容理解を軽視した扱いになるが、逆に、生徒のもつ統語的直観に近づけるのではないかと考えて、わからない箇所があっても止まらずに読み進めるように指示した。厳密な制限時間は設けなかったが、ほぼ全員が約5分で回答を終えた。

#### 【調査1で使用した英文】

Global temperatures (1)have risen by about 0.6 degrees Celsius since the nineteenth century. Other measures of climate (2)support the theory that the world (3)is getting warmer: satellite measurements (4)suggest that spring (5)arrives about a week earlier now than in the late 1970s, for example, and records (6)show that migratory birds (7)fly to higher latitudes earlier in the season and (8)stay later. According to the UN's Intergovernmental Panel on Climate Change (IPCC) — by far the most authoritative body of scientists working on this issue — humans (9)are probably not responsible for all the measured warming. But the trend (10)is undoubtedly due in large part to substantial increases in carbon dioxide emissions from human activity. Burning fossil fuels (11)accounts for about three-quarters of human emissions, with deforestation and changes in land use (mainly in the tropics) accounting for the rest.

(網掛け部が動詞、下線を施した語は未習語)

#### ②調査2

まとまった内容の英文を読みながら、指定された語の品詞を答える課題を与えた。英文を読む際にどれだけ品詞を意識しているのかを調査した。品詞という概念自体もよく理解していない生徒もいるので、この調

査では、品詞を問う箇所は名詞・動詞・形容詞のみとし、その旨を事前に生徒に伝えた。調査に使用した英文は調査1で使用した英文の次のパラグラフである。調査1を実施した直後に調査2を行った。調査2に際しては、調査1の英文の続きを読むことは事前に伝えた。総語数は191語で、そのうち使用教科書での未習語は75語(39.3%)である。品詞の識別を求められた箇所は恣意的に選んだ30語である。調査1と同様に、制限時間は設けなかったが、ほぼ全員が約7分で回答を終えた。

#### 【調査2で使用した英文】

There are two main (1)reasons why it has been hard for (2)societies to tackle climate (3)change. First, carbon (4)dioxide has a very long life span: it (5)exists for hundreds of years in the (6)atmosphere, making this a multigenerational (7)issue. Second, reducing carbon dioxide in the atmosphere can be done only on a truly (8)global basis, since emissions (9)mix throughout the atmosphere much quicker than individual (10)processes can limit their (11)impact. Beyond these known (12)facts, the picture becomes (13)gloomier. For instance, nobody (14)knows how rapidly emissions of carbon dioxide and other greenhouse (15)gases will rise in the future. That outcome (16)depends on the pace of global (17)economic growth and on the impact of technology on the (18)ways society (19)generates and uses useful energy. Equally, it is (20)impossible to determine precisely how the (21)climate will respond as greenhouse gases (22)accumulate to ever-higher (23)concentrations in the atmosphere. A warmer climate might make the planet (24)greener — which would (25)mean more carbon dioxide would be sucked from the atmosphere. Alternatively, climate (26)change might impose such (27)severe stress on the (28)biosphere that nature's (29)processes for removing carbon dioxide from the atmosphere would become less (30)efficient than normal.

(網掛け部が品詞認識を問われた語、下線を施した語は未習語)

### Ⅲ. 結果と考察

#### 1 調査1

表1はそれぞれの動詞に関する正答率を示したも

表1 調査1における正答率

	has risen	support	is getting	suggests	arrives	show	fly	stay	are	is	accounts
	(1)	(2)	(3)	(4)	(5)	(6)	(7)	(8)	(9)	(10)	(11)
正答数 (/75)	73	40	66	25	59	69	61	48	51	55	18
正答率(%)	97.3	53.3	88.0	33.3	78.7	92.0	81.3	64.0	68.0	73.3	24.0

のである。正答率が低かったのは(2)support, (4)suggest, (8)stay, (9)are, (11)accountsである。この中で(2)support, (4)suggest, (11)accountsの3つの動詞は未習語であり、特に(4)suggestと(11)accountsについては、教科書以外でも目にした経験が少ないことが正答率の低い原因であると予想される。(4)suggestと(11)accountsに比べて(2)supportの正答率がやや高いのは、「サポート」が日本語でも使われている語彙であるからかもしれない。ただし、日本語では外来語を動詞としてそのまま使用することはまずなく、「サポートする」のように「する」と組み合わせて使用することが多いので、support自体を名詞として認識していた生徒もいるのではないだろうか。

(8)stayは既習語であるが、接続詞thatやandによっていくつかの節が繋がったやや長い文の最終部に位置しており、コロンの降だけでも動詞が5つ含まれているので、読み落とした可能性がある。(9)areについては、明らかに動詞なのだが、直後のprobably(4件)や内容的に重要なresponsible(14件)を動詞として選んでいる生徒がいた。

表2に示すように、動詞ではないのに動詞として認識された語は55語あり、総合計でのべ354件あった。件数の多い方から並べると、use(53件)、changes(46件)、working(32件)、increases(19件)、responsible(14件)、measured(14件)、warming(12件)と続く。後述するが、調査後の自由記述で「ingが付いているから動詞だと思った」と回答している生徒が多数いる結果が反映されていると言える。また、use、changes、increasesについては、名詞としての用法もあることを意識できていなかったと考えられる。文脈や統語情報を無視して、先入観で動詞だと思い込んでいた可能性がある。measuredについても同様で、つい最近教科書で動詞としてmeasureを学習したことが原因だと思われる。いずれにしても、統語的直観よりもすでに学習した語彙情報に依存して判断している様子が見えてくる。

表2 調査1における誤りの内訳

行数	単語	品詞	頻度
1	about	前	1
1	degrees	名	2
2	Celsius	名	2
2	nineteenth	形	1
2	since	前	1
2	measures	名	3
3	climate	名	3
3	theory	名	2
4	satellite	名	1
4	meseaurements	名	6
4	spring	名	1
5	about	前	1
5	week	名	1
5	than	前	1
5	late	形	10
6	records	名	6
6	that	接	1
7	to	前	1
7	latitudes	名	1
7	earlier	副	2
7	later	副	1
8	UN's	限	4
8	According	副	12
8	Pamel	名	1
9	Change	名	10
9	most	副	6
9	authoritative	形	4
9	far	副	3
10	scientists	名	2
10	working	-	32
10	probably	副	4
11	responsible	形	14
11	But	接	1
11	warming	名	12
11	measured	形	14
12	trend	名	4
12	part	名	1
12	due	形	2
12	undoubtedly	副	5
12	substantial	形	4
13	increases	名	5
13	dioxide	名	3
13	activity	名	3
14	fuels	名	19
14	Burning	-	8
14	fossils	名	3
15	emissions	名	4
15	deforestation	名	4
15	changes	名	46
15	land	名	2
15	with	前	1
15	emissions	名	3
16	use	名	53
16	accounting	-	9
16	rest	名	8
	合計		354

2 調査 2

表 3 調査 2 における品詞識別 ※網掛け箇所が正解

	reasons (1)	societies (2)	change (3)	dioxide (4)	exists (5)	atomosphere (6)	issue (7)	global (8)	mix (9)	processes (10)
動詞	7	10	46	11	54	3	8	2	58	10
名詞	64	46	16	51	6	61	37	24	3	55
形容詞	4	18	13	13	15	11	30	49	14	10
無回答	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0
合計	75	75	75	75	75	75	75	75	75	75
正答率 (%)	85.3	61.3	21.3	68.0	72.0	81.3	49.3	65.3	77.3	73.3

  

	impact (11)	facts (12)	gloomier (13)	knows (14)	gases (15)	depends (16)	economic (17)	ways (18)	generates (19)	impossible (20)
動詞	15	11	2	74	16	54	6	13	26	10
名詞	34	48	21	0	49	14	24	44	26	7
形容詞	25	16	52	0	10	6	45	18	23	58
無回答	1	0	0	1	0	1	0	0	0	0
合計	75	75	75	75	75	75	75	75	75	75
正答率 (%)	45.3	64.0	69.3	98.7	65.3	72.0	60.0	58.7	34.7	77.3

  

	climate (21)	accumulate (22)	concentrations (23)	greener (24)	mean (25)	change (26)	severe (27)	biosphere (28)	processes (29)	efficient (30)
動詞	11	27	12	8	55	63	13	5	22	10
名詞	55	25	48	14	14	8	15	58	37	16
形容詞	8	22	16	52	5	3	44	11	15	48
無回答	1	1	1	1	1	1	3	1	1	1
合計	75	75	75	75	75	75	75	75	75	75
正答率 (%)	73.3	36.0	61.3	69.3	73.3	10.7	58.7	77.3	49.3	64.0

表 3 は調査 2 において、英文中の 30 個の語の品詞をどのように認識したかを集計したものである。(1)~(30)のうち正答率が 60% を下回っているのは、(3)change, (7)issue, (11)impact, (18)ways, (19)generates, (22)accumulate, (26)change, (27)severe, (29)processes である。(3)change と (26)change については、調査 1 のときと同様に、知っている語であるからこそ先入観で動詞であると認識してしまったと推測される。(7)issue を形容詞と認識した生徒が多かったのだが、making に続く句となっているため、比較的最近学習したばかりの「make + O + 形容詞」という文構造であると誤解した可能性がある。(18)ways と (19)generates の正答率が低い原因は、That outcome depends on the pace of global economic growth and on the impact of technology on the ways society generates and uses useful energy. という depend と結びつく on と impact と結びつく on が入り混じっているうえに、society 以下が ways を後置修飾するという統語的に複雑な構造になっていることが大きいと考えられる。(22)accumulate の識別がほぼ均等に分散したのは、生徒に馴染みがない語であるというだけでなく、英文の中ほどに位置して統語的な特徴を見つけにくい状況だったと思われる。(29)processes の認識は(10)processes よりも困難であったという結果が出た。(29)は今回の調査で使用した

英文のほぼ最終文であるので、単純に集中力が落ちていたとも考えられるが、前後にある語の情報からも認識の度合いに違いが出た可能性もある。すなわち、(10)process の直後に助動詞 can が続き、processes が主部の切れ目であることを意識しやすい一方、(29)processes の直前は that nature's となっており、's が所有格を示しているのか、has や is の短縮形なのかを判断するためには、直観とはいえず、複雑な最終文全体を見渡す必要がある。

品詞を識別する際に、統語的な情報を利用する場合もあるが、日本語の言語知識を活用することも考えられる。もともと国文法と英文法で使用されている文法用語や概念が統一されていないことは、メタ言語意識を向上させる面からは問題点として指摘されるが、英語が日本語として使用される場合は、さらに複雑になる。例えば、「グローバル」という語は日本語として使用されているが、「グローバル社会」の「グローバル」と「グローバルな社会」の「グローバル」は同じ品詞なのか、「高齢化社会」と「グローバル社会」という 2 つの表現を比べるとき、「高齢化」と「グローバル」は同じ品詞なのかなど、日本語の理解も単純ではないように思われる。

30 個の語のうち、日本語になっている(ここでは『新明解国語辞典(三省堂)』に見出し語として掲載されているものとする)語が 9 つある。チェンジ[名], グロ

ーバル[形], ミックス[名動形], プロセス[名], インパクト[名], ガス[名], シビア[形], グリーン[名形], アトモスフィア[名]である。(11)impact の正答率が低かったのだが, 文末に位置していることや直前に所有格 **their** が付いていることから判断すれば名詞であると認識することは容易であると予想できる。しかしながら, 日本語でも名詞として認識しているであろうインパクトを動詞や形容詞と認識した生徒が少なくなかったという事実は, **support** だけで「サポートする」という意味を表すのと同様に, **impact** だけで「インパクトを与える」という動詞の内容を表したり, 「インパクトの強い」という形容詞的な意味を表したりすると誤解したのかもしれない。また, (27)severe も正答率は高くない。音声を聴けば, 「シビア」に結び付いたのかもしれないが, 文字を読む過程において音声を内的にイメージできなかった可能性がある。

### 3. メタ言語意識の言語化

2つの調査を実施した後, 動詞を選んだり, それぞれの単語の品詞をどのようにして識別したりしたかを自由に記述させた。以下に生徒の記述を抜粋するが, 分類に関しては複数の要素が関係しているのので, 便宜上1つの範疇に入れたにすぎない。なお, 文頭に?を付したものは, 誤った知識と思われるもの, 内容がよくわからないものであるが, 生徒の言語知識(意識)の実態であるので, そのまま掲載している。

#### (1) 動詞についての記述

- ・ 三人称単数の **s** が付いているもの
- ・ **~ed, ~s, ~es, ~ies** が付いていると動詞っぽい
- ・ 名詞の後, または助動詞の後にあれば動詞
- ・ 普通は **~ed** や **~s** が付くはずの場所でそうなっていないければその前に助動詞がある
- ・ 複数形ではない **s** が付いていると動詞とした
- ・ 語尾に **s** が付いていたら名詞か動詞のどちらかということはわかる
- ・ 語尾に **ed** が付いていたら動詞の過去形だとわかる
- ・ **would** の後は動詞がくる
- ・ 前に名詞で後に **to, that, on, for** などがあると動詞
- ・ **~ing** は動詞ではない
- ・ 後に名詞, 形容詞, **that** があると動詞とした
- ? 動詞の前にあるあまり意味をもたないものは助動詞
- ? 過去分詞や進行形は動詞だと思った

? **to** の後に動詞がくる (**to** 不定詞の形になる)

? 日本語の意味がだいたい分かる語だったら, その日本語を伸ばして「~う」になったら動詞とした

? **~ing, est, er** などがついているとだいたい動詞

? **~ing** が付いたら動詞

#### (2) 名詞についての記述

- ・ **in the** ○○だと○○には名詞が入る
- ・ 名詞は主語や述語の最後にある。そこで止めても意味が通じそうなものを選んだ
- ・ **for** などの前置詞の後は形容詞か名詞にした
- ・ 名詞は2回続けて書かれることが少ない
- ・ 名詞は **~ing** が付いているものも含めて考えた
- ・ 場所を表す語だったら名詞
- ・ 複数形であろう **s** を見て名詞とした
- ・ 前に形容詞っぽいものがあれば名詞とした
- ・ 語尾に **er** が付いていたら **officer** とか人を表すことばだと思ったので名詞にした
- ・ 前に **the** や **a** が付いていたら名詞
- ・ 動詞が後についていたら名詞
- ・ 助動詞の前は名詞
- ・ 文末の場所・状態・時間の前は名詞
- ・ **~tion** で終わる単語は名詞
- ・ 名詞は主語になる
- ・ 接続詞の次にくる
- ? **ing** 形にかかっているのが **is, are** などだと名詞
- ? **er** が付いていたら名詞だと思った
- ? 名詞はカタカナで表される

#### (3) 形容詞についての記述

- ・ 動詞でも名詞でもないものを形容詞にした
- ・ 比較級や最上級になるものは形容詞が多い
- ・ 様子を表していたら形容詞
- ・ 名詞の前にあれば形容詞
- ・ **be** 動詞の後にきていたら形容詞
- ・ 語尾が **~er** のものは形容詞とした
- ・ 名詞の前は形容詞か動詞
- ・ 語頭に **im** ~つてきたら形容詞っぽい
- ・ 形容詞の後は必ず名詞がくる
- ・ 動詞と思われるものの後は形容詞にした
- ? 動詞の次に来る
- ? 形容詞は **~al** や **~ly** が付いている
- ? 語尾が **~tion** だったら形容詞っぽい
- ? 形容詞は **~nt** となっているもの

#### (4) 統語的な情報について

- ・動詞は文をつないでいるようなもの
- ・主語の後に来るのが動詞
- ・接続詞の後は主語＋動詞
- ・英文の語順は名詞→動詞→(形容詞)→名詞となる
- ・だいたい文は名詞→動詞とくる
- ・名詞の後や **and** の後に動詞がくることもあり、それを意識して動詞を決めた
- ・That, It, The の後は文の構成を考えて動詞にした
- ・その語の前方にも後方にも動詞がなさそうなら動詞とした
- ・知らない名詞のような単語が3つ以上並んだとき、1つの名詞と形容詞がセットになっている
- ・語尾に **s** が付いているかどうか (動詞か名詞)
- ・現在完了の文なのか、現在進行形の文なのか、文の構造を考えて、助動詞や動詞を考える
- ・1つの文に1個は動詞があると思って探した。that とか付いているともう1つの文がつながっていると思った。

? 文の始めの方は動詞が多いので、基本的に文の始めの方の単語を動詞と考えた

? 日本語に直して考えた。

? ローマ字読みのようにしてみてカタカナにしてみる

? S+V+O...なので文の2つ目の単語の次を目安に考えた。

#### IV. おわりに

本稿では、統語的直観と品詞識別に焦点をあてた2つの予備調査を通して、中学生がもっている言語知識およびメタ言語意識を記述しようとした。調査1では、英文を読む際に、過度に語彙の意味に依存している状況や未知語に遭遇したときに読みが中断している状況が読み取れる結果となった。調査2でも、既存の知識に依存しすぎるあまり、統語的な直観が十分に機能していない様子が見られた。メタ言語意識を言語化してみると、予想以上にさまざまな仮説を立てて英文を読んでいることや言語に関して鋭い観察ができていた学習者もいることがわかった。例えば、誤った知識である場合もあるが、それぞれの品詞に特有の接頭辞や接尾辞に言及したり、音読しているわけではないが、英文を読みながら、少なくとも未知語に出会ったときには、頭の中でその語を音声化したりしている様子もう

かがえた。ただし、英語の品詞を識別する際でも、日本語に訳して、その意味から判断しようとしているなど、日本語の知識に大きく影響されている面も見られた。

今回は予備調査であったため、学習者のさまざまな傾向を見ようとして、多くのことを網羅的に調査してした。統語的直観にせよ、母語の影響に関する調査にせよ、調査の目的を細分化し、分析の観点を明確にする必要があることを今後の取り組みの課題としたい。

#### 註)

- 1 生越 (2007) では、「メタ言語意識」は通常意識下にある言語に関する知識を取り出して対象化しようとする意識あるいは気づきを意味し、「メタ言語能力」とはメタ言語意識を呼び起こす能力を指すとされ、両者を区別することなく用いているとしている。本稿では、言語規則や自分の言語使用に関して客観的に認識できる能力を「メタ言語意識」と呼ぶことにする。

#### 引用・参考文献

中央教育審議会初等中等分科会教育課程部会 言語能力の向上に関する特別チーム：  
[http://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chukyo/chukyo3/056/siryo/attach/1366005.htm](http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/056/siryo/attach/1366005.htm) (2015年12月28日)

中央教育審議会初等中等分科会教育課程部会  
外国語ワーキンググループ：  
[http://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chukyo/chukyo3/058/siryo/\\_icsFiles/fieldfile/2015/12/25/1365545\\_3.pdf](http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/058/siryo/_icsFiles/fieldfile/2015/12/25/1365545_3.pdf)  
(2015年12月28日)

網田裕幸：「日英対照言語学」授業実践報告—言語観の変容を促す授業を目指して—、島根大学教育学部紀要、第48巻別冊、73-75、2015。

末岡敏明：言語教育の全体像を探る試み—4つの技能、3つの指導内容、2つの能力、大津由紀雄(編)危機に立つ日本の英語教育、大修館書店、2009。

村岡有香：気づきを高める英語教育、国際基督教大学教育研究所 教育研究 54、233-244、2012。

山岡大基：高校英語「読むこと」における発問の方向転換—「内容発問」から「形式発問」へ：教育実習生への指針、広島大学附属中・高等学校 中等教育研究紀要、第60号、47-62、2013。

- 大津由紀雄：「戦略構想」，「小学校英語」，「TOEIC」－あるいは，ここが正念場の英語教育，大津由紀雄（編）危機に立つ日本の英語教育，大修館書店，2009.
- 生越秀子：メタ言語能力を育てる小学校国語教育についての一考察－「伝え合う力」育成を視座に－，全国大学国語教育学会発表要旨集 112，13-16，2007.
- 阿波根寛英：中学校における生徒の言語意識を高める教育実践に関する研究－言語能力の向上にむけて－，奈良教育大学教職大学院研究紀要 学校教育実践研究，第5号，21-30，2013.
- 斉藤兆史・濱田秀行・柁木貴之・秋田喜代美・藤江康彦・藤森千尋・三瓶ゆき・王林鋒：メタ文法能力の育成から見る中等教育段階での文法指導の展望と課題，東京大学大学院教育学研究科紀要，第52巻，467-478，2012.
- 竹井光子・吉田悦子・藤原美保：談話レベルのメタ言語能力育成のためのコンパラブルコーパスの構築と活用，言語処理学会 第15回年次大会発表論文集，626-629，2009.
- 山室和也：国語教育における文法教育観の転換－メタ言語能力の一つとしての文法意識の発達と確立－，全国大学国語教育学会発表要旨集 108，31-34，2005.

## **Effect of Activating Metalinguistic Awareness on the Performance by Learners of English**

### **－ Preliminary Research on Syntactic Intuition －**

**Takeshi AKAMATSU, Etsuko SUZUKI, and Akira ONO**

**Abstract:** Activating metalinguistic awareness is thought to be significant in learning foreign languages. That is especially the case in Japanese schools, where very limited quantity of English is provided for learners. Metalinguistic awareness includes many aspects of language, such as phonology, morphology, syntax, and pragmatics. The present investigation focused on learners' syntactic intuition, and two preliminary studies were conducted. In one, junior high school students were required to choose verbs while reading an extremely difficult text in English. In the second study, students were asked to identify the parts of speech of several words while they read another difficult text. The results indicated that the students depended too much on the meanings of words—not on syntactic information given in the context—when they read English passages.

**Key words:** metalinguistic awareness, syntactic intuition, identification of parts of speech